からだとは・病とは(2) 漢方のカゼ薬 鈴木斉観（斉観堂鍼灸・気功治療院院長）

漢方のカゼ薬と言えば、葛根湯が有名である。葛根湯はカゼが本格化し、表面的に熱気が強く、本人が寒けを感じる本格化したカゼの初期で特に肩周辺の凝りが強い場合に用いられる。熱気は鼻から胸上部にかけて盛んで、頭部や背部に発散しようとしているが、肩周辺の凝りが強く、発散が阻害されている。そうした状態を葛根湯証という。言ってみれば「元気な」カゼの本格化した初期になりやすい状態である。初期でなくても状態が同じならば用いることができる。カゼは筋肉に影響してだるさを感じる。熱的な症状が基本であり、陽証のカゼである。普段から元気のある人はカゼの侵入に対しても「元気に」応戦する結果、陽証のカゼになる。こうした状態では１日３回というような仕方ではなく、回復しなければ２時間毎に飲む。「飲んだ後、覆って保温しろ」と古典にある。軽く発汗して回復するのが基本パターンである。

「陰証のカゼ」

カゼでも葛根湯証でなければ、違う薬方を使わなければいけないのである。更にカゼが奥に入り込み、息が激しくよく咳するようになり、節々が痛むようになれば、麻黄湯証になってくる。カゼをこじらせて、治ったかと思うとまた熱が出てきてそれをだらだらと繰り返すという状態ならば、桂麻各半湯証などが考えられる。そういう病の変化についての知識とその変化した状態（証）に合わせて薬方を用意しているのが漢方である。

カゼをひいても激しい症状にならない人もいる。普段から冷え性で自己治癒力が落ちている人では激しい症状にはならない場合が多い。頭痛や鼻炎、咳など軽くあっても熱っぽさは部分的で少なく、寒けが強く眠くなる。陰証のカゼである。こうした人に葛根湯など陽証の薬方を使えば悪くなる。陽証の薬はカゼの邪気を取り除く働きが主で、その時にからだの自己治癒力（正気）も消耗させるからである。寒けが主であるカゼには麻黄附子細辛湯などを使う。陰証のカゼ薬である。邪気を取り除くことより、カゼと戦う為の自己治癒力（正気）を補うことを主眼にしている。

麻黄附子細辛湯は麻黄、附子、細辛という３つ薬味から成る。麻黄は胸中に作用する。附子、細辛は温める薬である。温めて自己治癒力を高めるわけである。特に附子（トリカブト）はカゼに限らず冷え性に使う重要な薬味である。その毒性（＝薬効）の強さの為に、現在は焙（ほう）じて毒性が落とされているものが使われている。様子を見ながら大目に使う匙加減が必要である。この薬方によって、いったん陽証のカゼの状態になる場合もある。西洋医学的な症状を抑え込む治療に慣れた人には、悪化だと思われそうだが、そうではない。自己治癒力が高まったからである。その時には、その状態に合わせた薬方を使うということになる。

便宜上「カゼ薬」とは書いたが、ここでのカゼとはインフルエンザも含むし、最近問題となっているSARSも含んでいる。漢方はその病源微生物や病源物質が何かということとは無関係である。そうしたものに対するからだの反応の形を見ているからである。からだがセンサーであり、そのセンサーに同じ表示（証）がされれば、いわゆる病源がインフルエンザであろうと花粉であろうと同じである。西洋医学的な病気観を当たり前と思っている人が漢方を理解する為にはコペルニクス的転回が必要だろう。　（2004年２月雨水）

参考：『傷寒論真髄』（横田観風）